

A・MUSEUM

vol.48
〔2006.9.25〕



ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



常総市のワタラセツリフネソウ群落（2005.9.19撮影）



ワタラセツリフネソウ この花は小花弁（花の横に位置する小さな花びら）が短く黒いシミがあるのが特徴である（撮影：大和田真澄）

※詳しくは、<http://www.yamanet.co.jp/mo/mo/dp2005.10.htm>を参照ください。

新種の植物「ワタラセツリフネソウ」

わたらせぐすいぢ じせい
渡良瀬遊水地に自生しているツリフネソウのなかまが新種であることが確認され、昨年、「ワタラセツリフネソウ」として発表されました。この新種を発見したのは、渡良瀬遊水地で植物の研究保全活動を続けている大和田真澄さんです。

ワタラセツリフネソウは、栃木・群馬両県にまたがる渡良瀬遊水地のほかに、埼玉県や千葉県の数カ所で見ついています。そこで、昨年、大和田さんと県内の心当たりの場所を調査したところ、取手市や常総市で本種を確認することができました。今後の調査でさらに分布域が広がる可能性もあります。

9月から10月がこの花の季節です。みなさんもワタラセツリフネソウを探してみてください。

（企画課 小幡和男）

第38回
企画展

とんだネ・ついタネ・およいタネ

一種子の不思議を科学する

What a Wonderful Variety of Seed Dispersal!

地面に根を張^はって生きている植物は、動物のように自由に動くことはできません。しかし、道路工事や埋め立てなどで新たな土地ができると、あっという間にいろいろな植物が生えてきます。これらの植物はどうやってやってきたのでしょうか。

植物の一生の中で、植物が移動できる最大のチャンスはタネを散布^{さんぷ}するときです。空き地にすぐに入ってくる植物は、タンポポやハルジオンなど、タネに綿毛^{わたげ}がついていて風で飛ぶ植物が多いといわれます。しかし、植物たちは、風で飛ぶだけでなくいろいろな方法で、タネを遠くへ運ぶ工夫をしています。

植物たちは、自分のなかまの分布を広げるために、何億年という長い歴史の中で種子散布^{しゅしさんぷ}のしくみを進化させてきました。そのため、タネの形や大きさは極めて多様性に富んでおり、驚くほど巧妙にできています。

どんな植物がどんなしくみで遠くへタネを運んでいるか、みなさんも企画展で新たな発見をしてみてください。

〈風で飛ぶ〉

タンポポのように綿毛で飛ぶタネばかりでなく、モミジのなかまには羽根でプロペラのように回りながら飛ぶタネもあります。



セイヨウタンポポ

〈動物が運ぶ〉

トゲや粘液^{ねんえき}で動物にくっついて運ばれるタネがあります。オナモミのなかまはその代表です。多くの木の実^みは、鳥やけものに食べられてタネだけフンと一緒にばらまかれます。カタクリのタネにはアリの好きな付属物がついており、タネをアリに運ばせます。

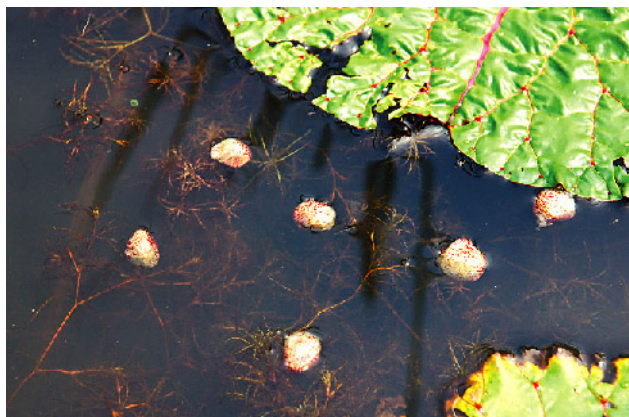


オオオナモミ

〈水に流される〉

歌にもなったヤシの実^みは、海流に乗って遠くへ運ばれる代表的な例です。池の水面に浮いて漂うオニバスのタネは3日ぐらいで底に沈みます。

(企画課 小幡和男)



オニバス

会 期 2006年10月7日(土)～2006年1月14日(日)

開館時間 午前9時30分～午後5時まで (入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日

※ただし、11月13日(月)は無料入館日とし、振替休館はありません。10月9日(月)は開館し翌日が休館となります。

●自然講座「もえタネ・やけタネ・芽が出タネ
—山火事と野焼きの生態学—」

日時：10月8日(日) 13:30～15:30

講師：津田 智氏(岐阜大学助教授)

場所：博物館内 定員：50名(先着順)

対象：高校生以上(小学4年生以上同伴可)

●大人&子どもフィールドガイド「御前山でタネを探そう」

日時：11月5日(日) 10:00～14:00

講師：鈴木昌友氏(茨城大学名誉教授)

場所：御前山(現地集合) 定員：各コース30名(抽選)

大人コース(中学生以上)：御前山一周

子どもコース(小学生のみ)：タネのコレクションづくり

※お申込は、事前に電話又は博物館ホームページにてお願いします。

※抽選のイベントは、開催日の3週間前までにお申込ください。

申込多数の場合は、抽選となります。

●タネの工作コンクール

募集期間：10月14日(土)～11月30日(木)

展示期間：12月13日(水)～1月14日(日)

※詳細はホームページ等をご覧ください。

総合調査研究

総合調査研究は、茨城県全体を対象地域とし、動物、植物、地学のすべての分野で総合的に自然の現状を調査していくものです。具体的には、動植物分野の場合、どこにどのような動植物が見られるかを正確に記録し標本を作成します。さらに、過去の調査結果と比較することにより、その分布の変化をとらえ、絶滅のおそれのある種や侵入しつつある外来種を特定することにもつながります。地学分野では、地層や化石の調査から茨城の過去の大地の変化を解明したり、気象現象の調査から環境の変化を把握したりします。

これまでの調査により、新種や茨城県での初記録種の確認、シカのなかまの足跡化石の発見



(体長約 1mm)

など大きな成果 総合調査で発見された新種ツクバムラサキトビムシをあげており、3年ごとの企画展や総合調査報告書などを通して広く紹介しています。

このような調査研究活動は、当館の展示やさまざまな教育普及活動の土台となるもので、進化基本計画で



大子町垣藤での足跡化石の調査 133個のシカの足跡が確認された。

進化基本計画実践報告5

は、その中心に位置づけられています。

総合調査研究は、膨大な時間と労力がかかります。そこで、調査は県内を4地域に分け、1地域に3年かけ、12年間で県内を一回りする計画で行っています。博物館開館の平成6年度にスタートした第1期総合調査は、平成17年度にやっと県内を1巡し、完了しました。また、多分野にわたる調査は、県内外の大学、研究機関等の研究員や地域の自然に精通する市民の方々の協力を得てはじめて実施が可能になるものです。これまでの調査に関わった関係者は100名を超え、このようなネットワークは博物館の大きな財産になっています。

平成18年度から、2巡目の第2期総合調査がスタートします。第1期では十分に調査できなかった地域や分類群がまだまだたくさんあります。自然環境の変化に伴う希少種の絶滅や外来種の増加など、さまざまな課題が累積する今日、総合調査研究の重要性はますます高まっており、そのニーズに答えていかなければなりません。同時に、これらの成果を活かした環境教育や展示を実現することによって、人と自然が調和しながら共存することの大切さを伝えていくことが博物館の重要な使命でもあります。(資料課 栗栖宣博)



植物収蔵庫 収集した標本は、温度・湿度を管理し半永久的に保存する。

竹箆

秋は実りの秋・収穫の秋です。通勤の途中で見られる広大な田圃では、黄金色に染まった稲穂が重い頭を左右に揺らしながら、風とともに豊作の祝い歌をうたっています。この豊穡の大地を見ていると、我が国の食糧自給率が40%、世界最大の穀物輸入国等とはとても信じられません。そこで我が家の食料自給率を上げるため、キノコ採りに出かけました。途中で竹箆を持った地元の老人に出会い、キノコ採りのポイントを教え

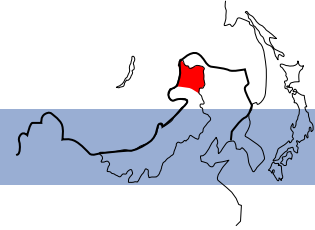
ていただきました。その折りの話です。

「竹箆のキノコ入れは、その編目からキノコの胞子がこぼれ落ち、それが来年のキノコになる。ビニール袋では来年の収穫はない」。おっしゃる通りで、この老人は科学的で理にかなった道具を用いていたわけです。私は手にしたビニール袋をそっと後ろに隠し、あのキノコ展で私は一体なにを学んだのか、日に焼けた真っ黒な顔を赤くした。

コラム by director SUGAYA



イラスト：福本陽子(ミュージアムコンパニオン)



中国内蒙古の草原を調査する

6月28日から7月10日の期間、私は筑波大学の中村徹教授を中心とするプロジェクトチームの一員として、^{うちもうち}内蒙古草原の植生調査に参加しました。昨年のア・ミュージアム vol.44でも報告しましたが、このチームの研究課題は、ユーラシア大陸に広がるステップ草原を各地で調べその比較をすることと、^{かほうぼく}過放牧や農耕が草原植生に与える影響を調べることです。今年の調査は昨年のモンゴルに続いて行われたもので、2003年のウクライナ、2004年のカザフスタンの調査と併せて、今年がまとめの年ということになります。

今回の調査地は中国内蒙古自治区の最北東部に位置するホロンバイル地方の草原です。私にとって内蒙古での調査は、当館の開館10周年記念企画展のために実施した2001年、2003年に続き3回目になりますが、ホロンバイルははじめて訪れる地です。この地方は内蒙古の中では最も降水量が多く^{しつじゆん}湿潤な気候であり、自然の豊かなところです。

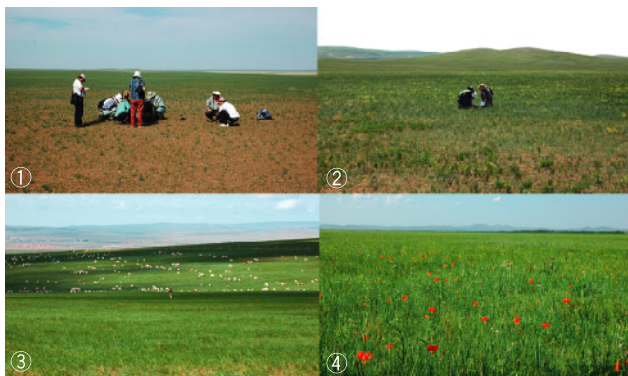
調査は、モンゴルとの国境に近い西部の比較的乾燥した草原から、この地方の中心都市であるハイラル周辺の湿潤な草原まで4カ所で行いました。写真でもわかるように、乾湿の傾度や放牧の強度によって、草



美しい内蒙古草原にて（写真は著者）

原の草丈^{くさたけ}、優占^{ゆうせん}する植物、出現する植物の種類数とその組み合わせなどが微妙に変化するようすがとらえられました。特に、ハイラル周辺の湿潤な草原では、数多くの美しい植物が咲き乱れ、すばらしい景観^{けいかん}でした。

このプロジェクト研究で収集された植物標本は、開館10周年を機に実施した当館と内蒙古自治区博物館の共同研究により収集された標本を併せて2,000点に及ぶ、当館の誇る貴重なユーラシアステップ植物コレクションとなりました。この成果は、目録や図鑑の形で公表したいと考えています。（企画課 小幡和男）



調査地となった草原
(1)過放牧により傷んだ典型草原、(2)適度な放牧が行われている典型草原、(3)比較的湿潤な典型草原、(4)湿潤な草甸（そうでん）草原



草甸草原で見られた植物
(5)ユリの仲間（*Lilium pumilum*）、(6)アヤメの仲間（*Iris dichotoma*）、(7)シャクヤク（*Paeonia lactiflora*）、(8)剣スゲの仲間（*Hemerocallis minor*）

虹をさがそう！

ある日の夕方、にわか雨が降った後、雲の切れ間から西日が差し込んできました。ふと^{すがおめま}菅生沼の方に目をやると、沼の上に見事な二重の虹が現れていました。見慣れた風景が、一瞬で別の風景になったかのようでした。

虹は太陽の光が雨粒などにあたってできるため、太陽と反対の方向にできます。博物館の東側にある菅生沼は、雨上がりに西日が差し込んでくると絶好の虹スポットになります。

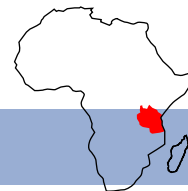
ところで、皆さんは虹の色を覚えてますか？虹は太陽の光が色ごとに分かれて目に見えたものです。虹を見つけたら色と順番をよく見てみましょう。雨上がりの虹を見つければラッキー！霧吹きやシャワーの水しぶきでも小さな虹が現れます。博物館野外・水の広場にも夏秋の間には噴水が出ているので、虹を探してみてください。

さあ、皆さんにはいくつのが見えるでしょうか。

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

（ミュージアムコンパニオン 片野久美子）





チンパンジーへの思い



ゴンベで出会ったチンパンジーの母親とこども

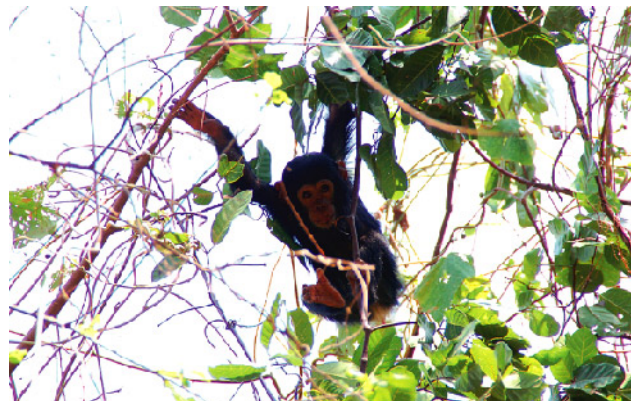
ボートが波に大きく揺れる。ここは、日本から1万キロメートル以上も離れたタンザニアのタンガニカ湖。湖とはいえ、水面は群青色。対岸も見えない。まるで海だ。「一目でいい。野生のチンパンジーに会ってみたい。」その思いを胸に秘め、私はやってきた。目指すはチンパンジーのすむ森「ゴンベ国立公園」。湖には山々が迫っている。山肌には、木はほとんどない。土砂が崩れて落ちているところもあるようだ。

キゴマの街を出てから、3時間近く過ぎようとしていた頃、急に周囲の山々が緑に変わった。ついにゴンベにやってきたのだ。ボートを降りるやいなや、「チンパンジーがいるよ。」との声。行ってみると、湖岸の木の上でチンパンジーが実を食べている。突然の出



タンザニア

ゴンベの森



「ゴンベへようこそ」と語りかけてくるようだ

迎えに胸が躍った。その夜は興奮して眠れなかった。

翌日、チンパンジーを探しながらの山歩きが始まった。森の中を現地のガイドさんが案内してくれる。食べ残しや糞は落ちている。ベッドも見た。でも、昨日とは違う。なかなかチンパンジーに会えない。森を歩くこと約3時間。「今日は無理かな。」との思いが頭をよぎったその時、ガイドさんの呼ぶ声がした。指差す方を見ると、木の上に黒い影が3つ。「チンパンジーだ!」。思わず叫んでしまった。うち2人は明らかに母親とこどもだ。夢中になってカメラのシャッターを切る。こどもがしきりにこっちを見ている。「ゴンベへようこそ!」とでも言っているようだ。かれらは木の実を食べたり、毛づくろいをしたり…。彼らの姿を、ひとつひとつの仕草を、この目に焼きつけた。あっという間に1時間が過ぎ、かれらと別れなければならない時刻が来た。「ありがとう。君たちに会えて本当にうれしかったよ。」と心の中で呟き山を下りた。

次の日、キゴマに戻る途中、ボートから、また何度も緑のない山々を見た。胸が痛くなった。

※この記事は、第36回企画展「サルを知りヒトを知る」のチーフを務めた資料課 飯田 毅が、平成18年8月にジェーン・グドール・インスティテュート・ジャパンのツアーに参加した手記をもとに構成しました。

サワガニのお引越し

みなさんは第3展示室にいるサワガニの姿を見たことがありますか。サワガニは歩行力が強く、水辺からかなり離れたところまで出歩くことができます。そのため、たびたび脱走しては、我々飼育係を困らせます。いつの間にか別の水槽に入っている時もあり、驚かされました。

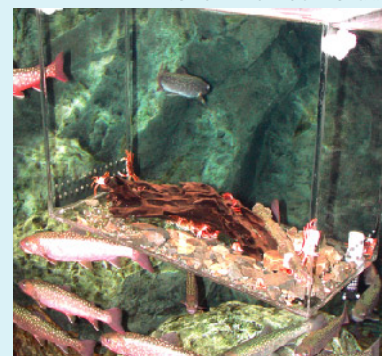
しかし、もっと困ってしまうことがあります。それは、岩陰や石の下に隠れてしまうことです。そうなる

と姿が全く見えなくなってしまう時もあります。こうなってしまうと、もうどうしようもありません。なんといっても相手は自然の生きものですから、「出て来なさい!」と言っても無駄です。

そこで、いつでも姿が見えるように、透明なケースに入れて飼うことにしました。このケースで飼うと脱走をふせぐ事もでき、まさに一石二鳥でした。今まで見たことのある人もない人も、ぜひ愛くるしいサワガニを見に来てください。

おさかな通信

(水系担当 石坂泰敏)



サワガニ

学会参加報告 MA（国際鉱物学連合）総会に参加して

国際鉱物学連合（The International Mineralogical Association (MA)）は鉱物学者間の国際交流や国際協力を促進し、鉱物学の研究に関わるさまざまな問題について検討する組織で、4年ごとに各国持ちまわりで総会が開催されます。今年は、7月23日～28日に神戸国際会議場を会場として第19回総会が開催され、50개국から研究者など975名が参加しました。

一口に「鉱物」といっても関連するテーマは幅広く、結晶構造、資源としての鉱物、岩石に含まれる鉱物、隕石に含まれる鉱物、宝石としての鉱物など、研究への取り組み方もさまざまです。今回の学会では、37のテーマ（セッション）が設けられ、それぞれ講演発表やポスター発表などによって活発な議論が交わされました。



鉱物コレクションの活用とデータベースのweb公開に関する学会講演の様子（アメリカの研究者による）

当館の鉱物標本についての発表（ポスターセッション）（写真は著者）



ポスターセッション会場で活発に議論する参加者

参加者は、自分の発表以外の時間は会場を移動して、それぞれ関心のある分野の発表を聞いていました。また、空き時間も研究者同士が語り合い、議論しながら交友を深める、重要な機会です。ポスターセッションの時間には、コーヒーやビール(!)を片手にポスターの前で議論を交わしている人も多く、国際学会ならではの光景でした。

私は「鉱物・地質系博物館」のセッションで、当館で所蔵している南部・小室鉱物コレクションの意義などについて紹介しました。標本の一部には詳細なスケッチ、標本や産状さんじょうについての記載などが残されており、その学術的な重要性について議論しました。また同時に、この学会は、国内外の博物館関係者と情報交換を行う貴重な場にもなりました。（資料課 小池 渉）

毒キノコ最新事情

秋の恵みのひとつにキノコがありますが、キノコというとその最大の関心事は食べられるか食べられないかということのようです。最近話題となっているのは、これまでに東北地方で比較的多く食べられていた（現在も食用としている人はいますが）「スギヒラタケ」による食中毒の発生です。

スギヒラタケは、数年前まではおいしい食べられるキノコとして扱われていましたが、平成16年の秋頃からその中毒例が多く報告されるようになり、現在は毒キノコとして扱うキノコ図鑑ずかんも増えました。このため、スギヒラタケを食べることについては、林野庁や地域の専門機関も注意をよびかけています。

最近の研究結果によると、スギヒラタケは、発生する環境によって毒成分をもつものともたないものがあるとのこと。さらに、食べた人の体質によって中毒症状に違いがあるということも分かってきました。このように少しずつその毒性についての研究が進められていますが、いまのところ中毒の詳しい原因は解明されていません。

昨年秋に開催した第35回企画展「地球をささえる不思議な世界」に来館された方々からも、「茨城県でも、人によってはスギヒラタケを食べている」といった話を聞きました。

環境の変化に伴い、毒キノコ事情も変化してきている昨今、誤食による中毒を防ぐためにも、キノコに関する正しい知識を身につけ、秋の恵みを楽しみたいものです。（資料課 亀山浩二）



スギヒラタケ（撮影：長谷川明）

トピックス

○年間パスポートの販売を開始しました

当館では、博物館をより身近なものとして楽しんでもいただくため、購入の日から1年間、何度でも入館することのできる年間パスポートの販売を7月から開始しました。料金は、企画展開催時の約2回分と大変お得です。

なお、7月中は、当館が開館して以来、550万人目のお客様をお迎えしたことにちなみ「博物館GOGOキャンペーン」として有効期間を55（GOGO）日間延長して販売したところ、1,300人を超える多くの皆様に御購入いただきました。

また、中には1カ月足らずの間に実に10回以上も御来館いただいた方がいるなど、大変好評をいただいております。

ぜひ、皆様もお得な年間パスポートを利用され、博物館を楽しんでみませんか。（管理課 竹内 祥）

区 分	購入から1年間有効	旧のみ有効	
	年間パスポート	本館・野外施設	企画展開催時 通 常 時
大 人	1,500円	720円	520円
高校・大学生	1,000円	440円	320円
小・中学生	300円	140円	100円



<年間パスポートのご購入に当たって>

- ・年間パスポートを御購入・御利用できるのはご本人様のみとなります。
- ・年間パスポートの販売は自然博物館の窓口のみとなります。
- ・パスポートは免許証サイズで写真を貼付します。写真は販売時にこちらで撮影いたしますので、御持参いただく必要はございません。

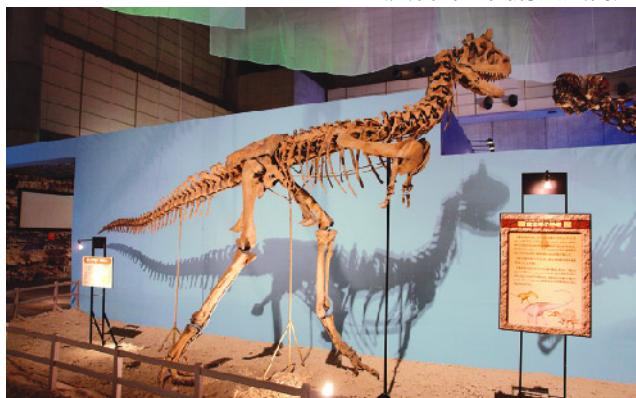
○世界の巨大恐竜博 2006

千葉市の幕張メッセで「世界の巨大恐竜博 2006」が7月15日から9月10日にかけて開催され、50万人を超える多くの来場者でにぎわいました。この博覧会は、「生命と環境—進化のふしぎ—」をサブタイトルとして、恐竜の巨大化と、多様化する生物の進化のメカニズムを探ることがテーマで、恐竜などの進化の姿を通して、次世代を担う子供たちに地球環境と生命、科学への関心を高めてもらうことが展示の目的です。

自然博物館では、アルゼンチンから産出したカルノタウルスなど10点を展示資料としてこの恐竜博へ貸出したり、体験フィールド「Dino Plaza（ディノプラザ）」で、トリケラトプスの頭骨を実際にクリーニングして

いく作業を実演したりしました。また、足立区、荒川区でのミニ移動博物館の開催や国立市、調布市など4会場での恐竜に関するセミナーの開催など、広報活動とともに学術的な面でも協力しました。

（資料課 国府田良樹）



カルノタウルスの全身骨格

○「海辺の自然誌」展で展示された市民の思い出の品々

第3回企画展「海辺の自然誌—陸と海との狭間で—」が9月18日で無事に終了しました。今回の企画展では6月10日の自然教室「海藻おしばをつくろう」で参加者が作った「海藻おしば作品」や市民から募集した「海辺での思い出の品」も展示しました。

「海藻おしば」は野田三千代先生（海藻おしば協会会長）の御指導のもと、伊豆の下田市やひたちなか市平磯海岸で得られた9種の海藻を使って製作されました。展示では、子どもと大人を合わせて66名の作品（複製）が並べられ、来館者の関心を集めました。なかには早速、「海藻おしば」を始めようと作り方を聞きに来る方もいました。

また、「海辺での思い出の品」では、24点ものコレクションが集まりました。その一つ一つの品には、家族との旅行の思い出などが詰められており、来館する方々の心をほのぼのとさせてくれました。

（資料課 池澤広美）



みんなの海藻おしばギャラリー（上）
海辺でひろった思い出の品（右）

各地のイベントに参加します！ーミニ移動博物館ー



つくばエクスプレス秋葉原駅でのミニ移動博物館（2006.8.3）

当館は、開館して以来毎年40万人近くの来館者をお迎えしており、常に魅力ある展示を心がけたり、楽しい体験教室を実施するなどして、来館者のニーズに応えられるように努めております。しかし、どんなに楽しい博物館にしても、その楽しさを知っていただかないことには、来館していただくことはできません。そこで当館では、さまざまなメディアを使った広報と併せてミニ移動博物館という実際に展示物を見て、さわって当館を知っていただく広報活動を展開しています。通常、観光イベント等に参加して、テント1張の中にタヌキやイタチなど動物のはく製や恐竜の骨の化石といったさわれる標本をはじめ、鳥や動物の鳴き声を聞く装置や珍しい昆虫標本などを展示しています。小さなスペースであっても、体験型博物館である当館のイメージを感じていただけるように工夫しています。

都心から当館にお越しいただくの便利な交通手段として当館でも大きな期待を寄せるつくばエクスプレスは、8月に開業1周年を迎え、沿線各地でさまざまな

催しが実施されました。当館では8月3日には秋葉原駅、19・20日には万博記念公園駅、26・27日に守谷駅でミニ移動博物館を開催しました。特に秋葉原駅では、地下の駅構内に設けられた特設会場で当館の展示を1日実施しました。平日ということもあり、夏休み子ども連れの家族が多かったものの、サラリーマンやOLなども見受けられ、学芸員の解説を熱心に聞く姿が印象的でした。

これからも、県内はもとより各地のイベントに当館を知っていただく機会として、積極的に出展していきたいと思います。お近くで見かけたときには、ぜひ会場をのぞいてみてください。（企画課 村山 哲）

編集後記

少しずつ夏の暑さが去り、秋の装いが随所に感じられるようになりました。今年の夏は、梅雨明けが遅く、さらに梅雨が明けてからも台風の上陸など、思い起こせば、「夏らしい」青空は少なかったような気がします。そのため今年の秋には、「秋らしい」すっきりとした青空を期待しているところです。

博物館の秋はイベントの季節。さまざまなイベントを実施しますので、皆様で御参加下さい。（TN.）

【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原 ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は
「猿島行き」乗車
～「自然博物館」下車、徒歩 5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、
愛宕駅下車～茨城急行バス
「岩井車庫行き」乗車～「自然博物
館入口」下車、徒歩 10分



【開館時間】

午前 9時30分から
午後 5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等
のお持ち込みはご遠慮
ください。

【入館料】

区 分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間 パスポート
	企画展開催時	通常時		
大 人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円(100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円(50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円(30円)	300円

(注)：()内は団体料金(20名以上)

未就学児・昭和13年4月1日以前に生まれた方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

次の日の入館料は無料です。

●4月29日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)

●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日

●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

●毎週月曜日

※11月13日(月)は無料入館日とし、振替休館はありません。

※10月9日(月)は開館し翌日が休館となります。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)
A MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2006年9月25日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎70番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
ホームページ <http://www.natpref.baraki.jp/>
E-mail webmaster@natpref.baraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。